

保育施設設計にみる子ども用デザインの考え方 —北欧を中心に世界の国を比較してみると—



北浦 かほる
NPO法人子どもと住文化研究センター理事長
(大阪市立大学名誉教授)

4. 遊び空間と休息空間

遊びの考え方は国によって違いがみられました。欧米では活動的な遊びは屋外ですするため、屋内には動的な遊び空間はありません。デンマークでも屋外は活動的遊び、屋内では遊具等による自由遊びと、場所を分離しています。

イタリアでは屋外遊びをあまり重視せず、レゾエミアでは屋内中心の創造性を育てる遊びを求めています。

日本では十分な庭園面積が取れない例が多く、多目的室や遊戯室等の動的空間の活用と共に、内外空間の連続性を生かした計画が重視されていました。

韓国は地下室に必ず運動空間が設けられており、一斉の動的遊びや個人の自由遊びを全て屋内で行っていました。

レゾエミアの保育は、多様な方法で子どもの興味や感性を引き出し芸術的創造力にまで高める環境作りや指導方法を工夫して、世界中から注目されて来ました。

光を重視して明と暗のアトリエ(図 1)を使い分け、ガラス仕切りで自然光を取り入れ、透過光や光の反射で遊ぶ機会をつくっています(図 2)。粘土や絵の具からリサイクル材料にいたるまで多様な素材も用意されていました。

公立の乳児保育所(図 3)や幼児学校(図 4)ではペタゴジスタ(教育学教師)とアトリエリスタ(芸術教師)の指導で、テーマに基づくプロジェクト学習を行っています。壁は活動の記録と作品の展示の場となっており、コンピューターや楽器を使って図書室や記録保管室・収蔵室に展示・保存しています。

乳児保育所では親密さが大切にされ、特にガラスの壁の多用で子どもが隔離されていると感じない工夫がされています。またキッチンや異年齢の子が遊ぶ様子を眺められるように計画し、さまざまな形の鏡を随所に配置して子どもが自然に学べる様な機会を多く作っています。

L'OASI は難民の相談にのるボランティアが主体になって組織化された半公立の小規模施設で、運動スペース、静的活動スペース(図 5)、変身コーナー(図 7)など、遊び別に専用空間を確保しています。

TOTEM(図 8)も半公立で、夜間保育ニーズには各家庭への 24 時間ベビーシッター派遣の形で対応していました。ここでもレゾエミアの保育空間の設え方(図 6)が、お手本にされていました。遊具や空間構成のための既製品のレベルが高く、家具類はレゾエミアの既製品が市販され、どの保育所でも使われていました。

休息用のソファやクッションなどが遊び空間の片隅に置かれている、そんな光景があちこちで見うけられました。

デンマークでは外部空間を中心とした自由遊びに重点が置かれていましたが、農家の納屋や倉庫に工具をそろえて工作室にしている所が多く(8月号参照)、目や手を使う訓練



図1 創造力を伸ばすアトリエ



図2 万華鏡の中で遊ぶ



図4 ディアナ幼児学校アトリエ

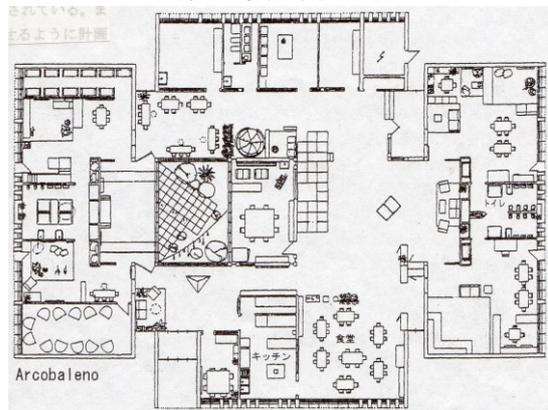


図5 L'OASI 静的活動の場



図6 ディアナ・ライトテーブル



図7 L'OASI 変身空間



図8 TOTEM 静的活動の場



図 10 大型遊具・デンマーク



図 11 L'OASI・動的活動



図 13・14 TMMK の環境保育・アメリカ



図 15 パルケアの遊び空間



図 12 休息空間・デンマーク 100mの森保育園



図 17 休息空間・アメリカ



図 16 環境保育 Ms. Angela



図 18 韓国・室内一斉遊び



図 19 韓国・室内遊び

で集中力を養えるようにしていました。豊富な工具や道具を自由に使い、リサイクル素材や森で拾った木の実などによる創作が工作室で行われています。また室内には大型遊具の遊びコーナーなども整えられていました(図 10)。

図 11 はイタリア L'OASI の室内の動的活動スペースとその遊具です。ここでもデザイン性の高い既製品の遊具が使われていました。

遊び空間の中に休息用の長椅子やソファを配したコーナーを設置していたのがデンマークとイタリア、アメリカでした。日本と韓国には、保育空間に休息用家具を置いて、保育士と子どもでくつろぐ、という発想自体が見られませんでした。

休息空間では図 12 に示す様に、デンマークの空間が家具や照明器具に至るまで最も配慮が行き届いている様な印象を受けました。イタリアでもさりげなく様々なタイプの休息椅子がちょっとした空間に配され、保育者や子どもが自然に使えるように置いてありました。

アメリカの室内遊び空間の特徴は教育的配慮に基づいた「環境保育のための空間」です。環境保育とは、コーナー毎に様々な遊具をセッティングすることで子どもの興味を刺激して自然に遊びに引き込まれるように工夫された空間を提供

することを基盤とした保育方法を指します(図 13・14)。

図 16 は遊具の置き場が一目で分かる様にセッティングした Ms. Angela 宅の遊具収納です。ライセンス取得による child care ですが、狭い家で低所得層の子を対象に高レベルの教育を目指して、夫婦が頑張っていました。

サンフランシスコ国際空港関係者の 24 時間保育園パルケアの遊び空間が図 15 です。

レキシントン企業の企業内保育所の休息空間(図 17)は、環境保育を掲げた様々な空間づくりと一体化して休息部分が作られていました。多様なタイプの休息用家具に至る所で見られ、雰囲気作りよりも“QUIET”等の貼り紙が目立ちました。

日本では自由遊び中心ですが、屋内の自由遊び空間としては造られていません。韓国では一斉の教育プログラムが多く、自由遊び時間の約 1.5 倍程度もあります。室内での一斉の静的遊び(図 18)や、一斉の動的遊び(図 19)が見られ、自由遊びは殆どみられませんでした。

韓国の保育施設の特徴として、地下階の多用があげられます。遊戯室や体育室という名称で、集団活動、体育、サマソリなどを行う場として重視されていました。地下にはドライエリアが設けられていましたが、その効果は殆ど無く、昼間から照明設備が必要な状況でした。

■北浦かほる

大阪市大卒。倉敷建築研究所(現・浦辺設計)を経て大阪市大名誉教授。帝塚山大学教授。学術博士。NPO 法人子ども住文化研究センター理事長。居住空間デザイン学及び環境心理学。主著書に、「世界の子ども部屋」「住まいの絵本に見る子ども部屋」「インテリアの発想」「インテリアの地震対策」

